

2. 添田本町地区と神幸祭にみる歴史的風致

(1) はじめに

添田本町地区は、岩石城の城下として形成され、南から北へと貫く日田道が小倉から天領日田を結んだことにより、英彦山参詣路としての役目を果たす日田道の要衝として繁栄した。日田道沿いを中心に、旧商家や寺社等の歴史的建造物が残っている。

添田本町地区の神幸祭は、夏の疫病退散や村中安全を祈願して、山笠の飾り付けの準備から、当日神輿の後を山笠が巡行、山笠の飾り付けを家に持ち帰って玄関先に飾る習俗であり、地域の人々により毎年行われている。



図 添田における通称の地名と主要建造物等の位置

(2) 添田本町の市街化の形成背景

添田本町地区の市街地の形成は、中世山城である岩石城の城下として形成されたことに端を発する。岩石城は、平清盛が大宰大式であった頃、保元3年(1158)に大庭平三景親に命じ、添田町の東にある標高454mの岩石山の山頂を主郭として城館を築かせた。英彦山修験道の行場でもあった奇岩と急峻な山裾で構成され「豊前一の堅城」という要城であったことから、築城以降、菊池氏、大友氏、大内氏、秋月氏に攻められ、帰属を変更しながら、豊前の要城として存続する歴史を繰り返した。天正15年(1587)、豊臣秀吉の九州平定の折、4月1日に秋月種実の城将熊井越中守、芥田悪六兵衛らが守る城館を蒲生氏郷、前田利長は2万もの軍勢を率いて一夜にして陥落させた。岩石城陥落後、秋月氏、島津氏など悉く降伏し、秀吉が九州国分けをする発端となった。以降は小倉城の付城として存続し、豊前領主毛利勝信や初代小倉藩主細川忠興に支配されるが、江戸時代初期の元和元年(1615)の一国一城令により廃城となった。

この岩石城を中心として、その麓に位置する現在の添田本町地区などに城下町が形成された。添田本町地区を縦貫する不動川は、その上流に位置する不動滝に源流をなす川で、途中に不動池を形成するなど水量豊富で緑豊かな山麓を形成しており、難攻不落の岩石城の礎となった。『添田町誌』(昭和34年(1959))によると、江戸期まで不動川からの水流を湛えた堀割が添田本町地区の南側に形成されていたと示されている。また、不動池とその周辺は、現在添田公園として整備されている。



岩石城本丸跡

添田公園は、峰地炭坑を興した蔵内氏の同族であった久良知妙真が、岩石山のもつ山谷林泉の美を活かして不動池周辺を整備したことに由来し、昭和6年（1931）に開園した公園で、昭和34年（1959）に都市公園に指定されている。

公園の東南側に不動滝があり、この水が公園の南側に位置する不動池に流れ込み、西側に流れて不動川となる。不動滝は、高さ約30m、幅約2mでその水は清冷で、岩に砕けて飛沫する様子は盛夏でも涼を覚える。

また、不動池周りに多数植えられた梅の古木をはじめ、2,000本余の桜、4,000株余のつつじが春夏を彩り、秋には山麓の紅葉、蔦、ハゼなどが錦色に輝き、園内そして岩石山への動線を趣のある情景で、散策者・登山者を迎えている。

公園区域内には、添田神社や白山神社等の神社が立地する他、美術館や体育館等の公共施設が立地し、多くの方が訪れている。



不動滝



不動池

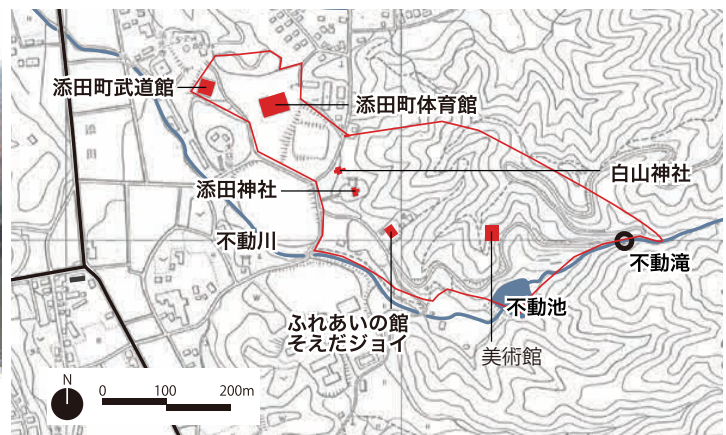


図 添田公園の区域と配置

近世以降の添田本町地区は、南から北へと貫く日田道が小倉から天領日田を結んだことにより、英彦山参詣路としての役目を果たす日田道の要衝として繁栄した。慶長7年（1602）、細川忠興は小倉入りしてから領内の検地を行い、「手永」制という行政制度を導入した。手永は、小倉藩の統括支配の制度の一つで、田川郡には6手永を配置し、その一つを添田に設けた。添田本町地区には、手永を仕切る大庄屋が置かれたことから添田手永の中心をなした場所である。

小倉藩は、企救と田川、京都、仲津、築城の5郡と上毛郡の一部を領域としており、各郡を統括支配するために郡代という役を設けた。この郡代は、家老に次ぐ重職であったと言われている。この郡代の下には各郡を統轄する奉行が置かれ、これを筋奉行と称した。筋奉行の管理する各郡内は、だいたい6～7千石、村数にして15～25村を単位として1人の大庄屋を置き、この大庄屋が管轄する地域内を手永と称した。田川郡には、糴、上野、金田、伊田、猪膝、添田の6つの手永がおかれていた。

添田手永は、元松や副田、柿原、白土、成光（現、大任町）、落合、枳田、野田、添田、庄、新城、真木、岩瀬、伊原、津野（現、添田町）の各村を管轄し、これら各村には庄屋が置かれた。

手永の中心で大庄屋が居していた添田本町地区は、日田道を中心として道を横切る2筋の川により地名が分かれており、今日もその地名が地域住民の間で使われている。『郷土史誌そえだ第12号』（昭和62年（1987））によると、通称の地名は、添田の日田道の北側を流れる清水川、南側を流れる不動川により3つに区分される。不動川より南側を上町組、不動川と清水川の間を下町組、清水側の北側を下原組と通称で呼んでいた。



昭和30年（1955）頃の中島家住宅周辺

添田手永の中心地であった添田本町地区上町・下町には、商家として重要文化財「中島家住宅」があり、その近くに、藩公御成のとき開かれたという通称「御成門」を残す大庄屋中村家には、今もなお貴重な歴史的資料が豊富に保持されている。また、町指定文化財「中村家住宅」や現在も商業を営んでいる醤油屋などの歴史的建造物が良好な市街地を形成している。また、不動川に架かる本町橋の背後にある岩石城大手門跡には「法光寺」が建てられた。

添田町の古い時代の商業は明らかではないが、添田手永として、また英彦山参詣の通路として、上町や下町の日田道沿いに人家が建ち並び、商家も生まれた。明治の中頃には、法光寺橋の上下に数軒の呉服店、油屋、質屋、材木店、宿屋、醤油店、雑貨店等の商家が建ち並んでいた。呉服など商品の仕入れは中津や小倉が主で、馬の背を借りて運搬していた。



図 添田本町地区周辺町割りと主要な歴史的建造物 『大絵図』（明治初年頃）

（３）歴史的風致を形成する建造物

1) 中島家住宅（重要文化財（建造物））

中島家住宅は、小倉から英彦山に至る日田道の宿場町の一つである添田本町の下町に位置し、小字名は下町東側である。中島家は屋号を「和多屋」と称する商家で、江戸時代には醤油の製造で財を成し、名字帯刀を許された旧家である。明治初年から大正年頃までは酒造業を、その後は醤油醸造業を営んでいた。こうした来歴により屋敷内には酒蔵や醤油蔵と称する附属建物が残存し、主屋と併せて重要文化財に指定されている。『重要文化財中島家住宅保存修理工事報告書』（昭和60年（1985））によると、大屋根鬼瓦のへら書きから主屋は安政6年（1859）の建築とされる。

主屋は平入の一部を二階建とする建物で、妻入の町家が多い宿場町の中では屋敷の間口も広く、また建物も上質で際立つ存在である。室内は六間取りの母屋に下屋による拡張部の空間が付属する形態であるが、この六間取りの形式は近隣の農家建築に見られるもので、町家でありながら農家の間取りの影響を受けている。更に土間寄りの4室部分は根太天井として2階が設けられているが、奥側の座敷、仏間となる空間には2階は設けられていない。外観において棟落ちしている平屋部分がこの2室に該当する。この間取りがこの地域の商家の規範となっている。建屋全体は白漆喰の塗屋であるが、格子窓や下見板張りの腰壁、真壁造の土塀など、随所で木部を露わにした白黒のコントラストが強調される格式ある意匠が美しい。また、屋敷の奥には広大な庭園が広がり、岩石山を借景した作庭が広がる。



中島家住宅（重要文化財（建造物））



岩石山の借景

2) 中村家住宅（町指定文化財）

中村家住宅は、中島家住宅（重要文化財（建造物））から南側の添田本町地区上町に位置し、小字名は上町東側である。近隣には細川忠興が寄進した総檜造の山門が建つ古刹法光寺や添田手永中村家の御成門、旧添田銀行の古式建造物が立ち並ぶ。中村家は屋号を「新屋」と称し、古来酒造業を営んでいたといわれるが、明治44年（1911）に「ニダイマス」の商標を得て、醤油製造業に専念した。同年11月天皇の福岡巡幸に際し、醤油1樽を献上し、その後、数々の品評会で優秀賞を受賞、昭和3年（1928）第11回全国酒類醤油品評会で一等優秀賞を受賞するなど評価も高く、後継者がなく平成10年（1998）に廃業するまで、近隣より多くの人が買い求めてきた。建物は明治末に火災によって失ったが、大正初期に再建した。店舗棟は外観漆喰塗りの土蔵造で総二階建、土間みせ、通り庭が店舗棟の半分以上を占める。正面の大戸口を入ると、土間には裏口まで2列の御影石の棹石が並べられ、荷車の軌道が設けられている。2階には表に面して重厚な納戸がある。



中村家住宅（町指定文化財）

店舗棟の北側に前室、玄関の間、仏間と続き、格調高い書院のある座敷へと繋がる。店舗棟と座敷棟の間に1坪ほどの坪庭があり、その背後に4畳半の茶室が備わり、裕福で格式ある商家であったことが窺える。不動川の東側に醸造棟、倉庫など古来からの醸造所があり、醤油樽や醤油溜り、絞り器等の醸造具が当時のまま残され、醸造の盛んであった添田本町地区の風情をよく伝えている。平成23年（2011）に町指定文化財に指定された。

3) 宮崎家住宅

宮崎家は、上町西側に位置し、中村家住宅に対面する。地元では「御隠居」と称せられ、白山神社の宮柱家である。宮柱とは、神社を守り継いでいく柱元という意味で、寛永21年（1641）の遷宮、宝永6年（1709）の本殿建立、文化11年（1814）の拝殿改修、昭和6年（1931）の鳥居建立、これらの全てに施主として名が残されている。また、10月中旬に行われている白山神社権現講にも宮柱家として深く関わっている。

町の資料によると、宮崎家住宅は明治29年（1896）の本瓦葺の建物で、添田本町地区の規範となった重要文化財である中島家住宅の意匠をよく留めている。土間から仏間座敷へと3間続き、その右手に書院がある。組子欄間、簀子障子など当時のままの意匠も美しい。縁が廻る2階も重厚で、荘厳な風格を醸している。



宮崎家住宅

4) 御成門

法光寺前の通りを挟んで、西側に大庄屋添田手永中村家の居宅がある。小倉藩主細川家が行政区画として導入した手永の中心として発達した添田本町地区の中核であり、添田本町地区に町家が集中し、独自の町割りが完成した。大庄屋自体の建物は改築して見られないが、『添田町誌』（昭和34年（1959））でも存在が確認できる御成門が通りに面して残されている。細川家後に小倉入りした小笠原家も手永制度を引き継ぎ、中村家は大庄屋として地域統括にあたり、藩主の鷹狩りや英彦山参詣の折たびたび開門した。改修されているものの江戸時代往時の風格を残す門塀が通りを引き締めている。



御成門

5) 旧添田銀行

『添田町誌』（昭和34年（1959））によると、添田銀行は明治34年（1901）1月2日に添田町日田道に開業し、後に法光寺前に移転した。添田銀行は、昭和2年（1927）からの金融恐慌も乗り切ったが、昭和7年（1932）に解散に至った。その後、民家として使用され今日に至っている。1階部分は改修されているものの、2階外観は当時のまま保存されており、大正期の風情をよく止めている。寄棟瓦葺、



旧添田銀行

二階建の洋館で、町家建築が多い本町通りのまち並みの中で、独特の雰囲気醸し出している。大正時代、添田本町地区には添田銀行を始め、田川銀行、吉井銀行などの地場銀行があり、この地域の発展ぶりを窺うことができる。

6) 法光寺

法光寺は、天然上人（浄祐）の開基と伝えられている。天然上人は文明元年（1469）京都で浄土宗を学び上人の位を得て、同6年（1474）豊前柳ヶ浦（北九州市門司区）に法光寺を創立した。同14年（1482）上人は再び上洛し、本願寺第八世の蓮如に会って、その弟子となり、浄祐の法名を授けられ、同16年（1484）蓮如の弟子の順誓とともに柳ヶ浦に帰り、翌年蓮如真筆の額を掲げた。その後、天然上人は豊前豊後の地に浄土真宗の教えを広めた。



法光寺

天然上人没後、順誓が法光寺二世となり、京都郡荒津井上名に寺を移し、文禄元年（1593）田川弓削田村で教えを広め、慶長4年（1599）に添田野田口の新町副田峯高屋屋敷に移った。その後、慶長年中に岩石城大手門跡に寺地を拝領し、山号「寂静山」を頂いた。総本瓦葺の本堂は明治年中に焼失し再建されたが、消失をまぬがれた総檜造の山門には細川家拝領の九曜紋墓股が今も掲げられる。小倉藩主細川家が大庄屋と寺門を対峙して配置し、日田道沿いの町割りを創出したことがわかる。『添田町誌』（昭和34年（1959））の古写真から往時の姿を伺うことができる。

7) 白山神社

白山神社は『白山神社縁起』によると昔、新羅国曾褒里から3神が岩石山にやって来て、岩石山に草木が生えるようにした。その後、吾勝尊（天忍骨尊）が天降ったという。保元3年（1158）に平清盛の家臣の大庭景親が岩石城を築城した折、豊比咩神社と曾褒里宮を合わせて白山明神を興して岩石山西麓に白山権現社を移した。その後宮崎家が代々宮柱家として造営してきた。記録には「葛城白山宮御遷宮 寛永二十一（1644）甲申三月 山下 御遷宮奉仕 … 添田町 宮崎五郎衛門」、「奉建立白山宮



白山神社

宝永六（1709）歳乙丑十月二十一日 … 施主 宮崎五郎兵衛」「白山宮拝殿再建 文化十一（1814）年甲戌卯月四日 … 宮柱 宮崎彌兵衛」と有り、白山宮と深い縁が認められる。現在は添田神社の北側に隣接しているが、元は西側の台地上にあり、昭和54年（1979）に移築された。『添田町誌』（昭和34年（1959））の古写真から往時の姿を伺うことができる。

（４）歴史的風致を形成する活動

１）神幸祭の歴史

添田本町地区の神幸祭の由来については、添田町編『岩石城史』^{がんじやくじょうし}（昭和 52 年（1977））によると、古来、5 月中旬に上添田にある須佐神社^{すさじんじや}の祇園祭として行われていたもので、文久元年（1861）の記録^{にしほんまち}が西本町（町二区）で保存されている。かつて祇園祭は、上添田組と町組が共同して祭礼を行い、白山宮から神輿が出て、御旅所に移り、翌日須佐神社に登り、白山宮に還御するものであった。

これについて、『郷土史誌そえだ第 3 号』^{きょうどししだいごう}（昭和 56 年（1981））によると、時代と共に白山権現社から須佐神社等を勧請し、年々祭りが大きくなり、また村人たちを動員した祇園祭となり、近郷近在では稀にみる一大行事となったとされる。江戸時代には、小倉藩主小笠原公も代々添田祇園祭に勅使代参を立てていて、山車^{だし}の最上段横幕に、小笠原公の三階菱の家紋が施されている。祇園祭の行事は、5 月 14 日の初日がお下りで、翌 15 日にお上りがあった。14 日は発輦神事で神輿に神移しが済むと神輿方にお神酒が振舞われ、お下り行事となる。神輿方は担ぎ手 8 名と付添 2 名で、白丁^{えぼし}に烏帽子姿に白足袋、草鞋履^{ぞうり}でこれを担いだ。神輿が出立するとそれに続いて山車が巡幸した。添田本町地区をとる神輿や山車の様子を写す昭和 30 年（1955）頃の古写真が残されている。



須佐神社



添田本町地区をとる神輿の様子
（昭和 30 年（1955）頃）



添田本町地区をとる山車の様子
（昭和 30 年（1955）頃）

２）現在の神幸祭

神幸祭は毎年当番役に受け継がれ、神輿台帳、山車台帳に記録され、明年の当番の組に申し送っている。

神幸祭は、まず最初 5 月 10 日に注連下し行事^{しめおろ}があり、山元に当たった組中の男衆は注連下し行事を行い、女衆は全員で直会^{なおらい}の準備をする。

山車の飾り花のバレンは、花切と称して、各家庭で花形に切った和紙を色染めする。それを長さ 5m 程の割竹に色紙を巻きつけ、桜花の切花を付け 500 本余作り、稲穂に見立てて、山車の四方に垂らす。今は公民館で仕立てている。



公民館で行われるバレン作り

山笠はお上り、お下りのある前日の夜、提灯山として町内を練り歩く。祇園山笠の名残と思われ、前祭りとして夜7時頃に公民館から出立する。

お上りの当日、早朝に当番役は行橋市長井浜まで神輿、山車の前祓いのため御潮井を汲みに行き、他の者は総掛かりで前夜の提灯を外し、花笠パレン、花飾り、刺繍入り横幕をつけ山笠に仕立てる。

神官が白山神社で神移しを行い、神輿を御旅所まで運び、発輦祭が行われる。午後1時頃から神輿のある御旅所で発輦神事を行い、神官、氏子、担ぎ役が御旅所からお練を始める。この後、2時頃から山車が安置されている公民館から出立する。



御潮井採りの位置



御旅所での神輿発輦神事



中島家住宅前を通る神輿行列

上添田区の神輿の先頭には赤旗10本が進み、神輿元が袴姿で白幣を持って進む。その次に、宮司、奏楽が道囃子を演奏しつつ進み、紋付羽織と袴姿の区長、神社総代や有志が続いた。道路狭しと練り歩き「ワッショ〜ワッショイ」のかけ声勇ましく行進する。これに続いて台持ちが2名、その次に神社総代や有志が大勢、お供として続く。上添田本町地区の神輿が後に続いて行動する。その次に上添田区の来年の山元が、袴姿で金幣を持って進み、本年の山元が御潮井桶を持ち、前祓いとして子笹で左右に浄めの御潮井を振りつつ進む。

午後5時頃に御旅所に着き、供え物や張幕、献灯提灯等の飾り付けが済んで、宮司によりお通夜の祝詞奏上がある。これから夜市やお通夜が行われ、一般参詣の人出で御旅所広場は大混雑し、身動きも出来ないほど賑やかである。

山車行列は、町二行政区と町三行政区の2つの地区において行われており、祭りの内容や練り歩くルート等が異なる。山車の先導役は山車の屋根に登って誘導し、内部には銅拍子役の子供が乗車し、太鼓や鐘を鳴らしながら街を練り歩いている。

本町地区上町組である町二行政区の山車行列は土日でルートを変えて巡幸する。



幟と鮮やかなパレンが映える山車行列



中島家住宅前の日田道を上る山車行列

1 日目のお下りは、法光寺前の御旅所から出立し、旧街道の面影を感じさせる旧添田銀行、御成門、宮崎家住宅、中村家住宅などが立ち並ぶ日田道を上町方向に上り、一旦白山神社方向に向かう。不動川際まで行くと、ここで白山神社方向に参拝する。ここで折り返し県道に出て添田郵便局を経て、上添田地区方向へ向かい、途中白山神社へと向かう。上り坂前で折り返し再び郵便局から神輿お披露目のため添田駅、添田町役場、旧町場の^{たいしょうまち}大正町地区まで行く。ここで折り返し、郵便局前から旧道に入り、西本町^{にしほんまち}を練り歩く。下町堺道から日田道へと戻り、御旅所へと帰る。2 日目のお上りは、ほぼ同じ行順を辿るが、上添田地区、添田駅、大正町地区は練らない。最後に御旅所には帰らず、公民館へと向かい、山車を片付け、その後直会がある。

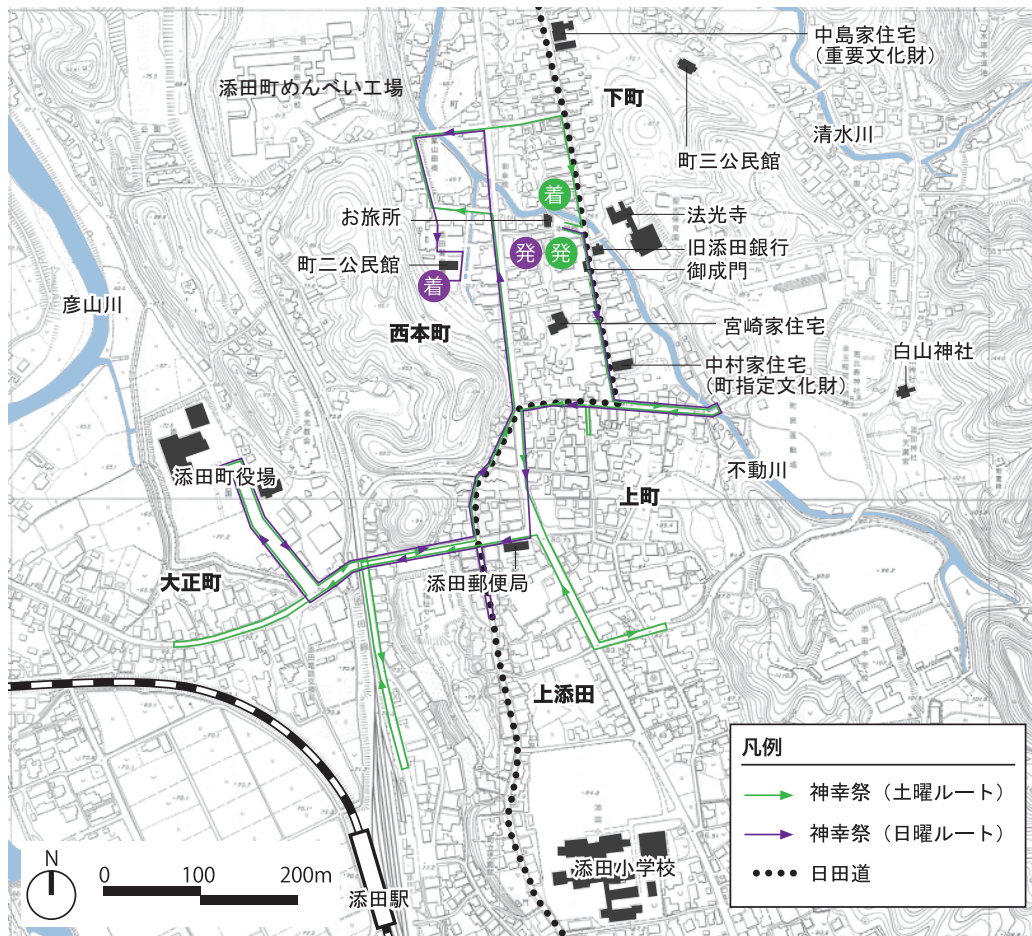


図 神幸祭ルート（町二行政区）



中村家住宅前を通る提灯山巡幸



御旅所から岩石山を望む

本町地区下町組である町三行政区の山車行列は、金曜の夜山・土曜・日曜でルートを変えて巡幸する。

金曜の夜山は神輿庫から出立し、岩瀬地区方向に向かい、村口堺まで行くと折り返し、県道まで出ると伊原地区方向に折れ、町四区行政区堺まで行き、そこから折り返して、下町地区を日田道の中島家住宅方向に上り、中島家住宅から白山神社方向に入り、急坂となる途中で折り返す。再び中島家住宅の交差点から御旅所まで行くと町堺道から添田町めんべい工場方向に向かい県道に戻って神輿庫へと帰る。お下りは、添田駅前広場で神輿のお披露目のため、添田駅まで行っている。

お上りは、夜山と同じであるが添田町めんべい工場を周回する行順を辿り、最後は中島家住宅から町三区公民館に着き、ここで直会座がある。

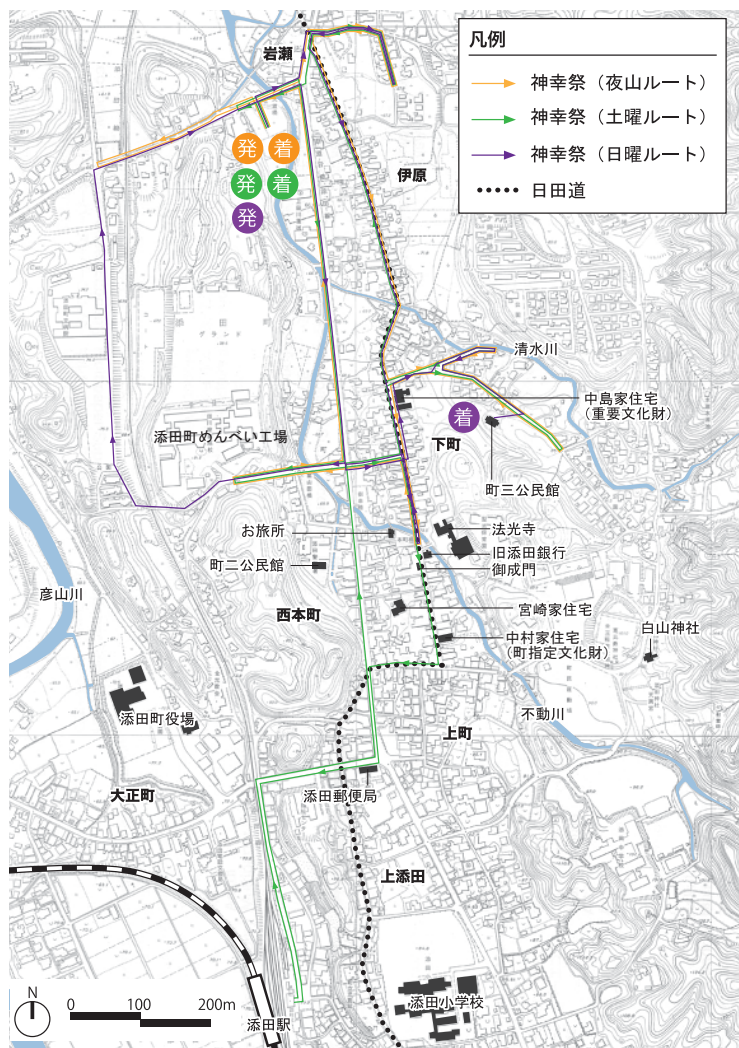


図 神幸祭ルート（町三行政区）



提灯山巡幸の様子



中島家住宅周辺から岩石山を望む

祭りの最後、山車に飾られたバレンを人々がもらって帰り、屋根の上に投げ上げて家守りとしたり、玄関先にかけて、災い除けにする習わしが現在も継承されている。町中を歩くと、玄関先に飾られる色とりどりのバレンが祀られており、その様子から現在も信仰が保たれた独特の趣を感じ取ることができる。



玄関先に飾られるバレン

(5) まとめ

添田本町地区の神幸祭は、英彦山にまつわる神幸祭の流れと祇園祭の流れを汲む祭りとして、今は疫病退散や町内安全を祈願している。この神幸祭は、岩石城の城下町に端を発して整備された日田道沿いの町割りの上に、中島家住宅を中心とする町家建築が軒を連ねる中で老若男女関わらず参加する祭りで、稲穂に見立てた華やかなバレン飾りをなびかせて山車が巡幸する様は、白壁に映えて非常に美しい。往時の町家の人々の歓声や活気が蘇ってくるようであり、白山神社の権現信仰と相まって比類なき情緒が残されている。

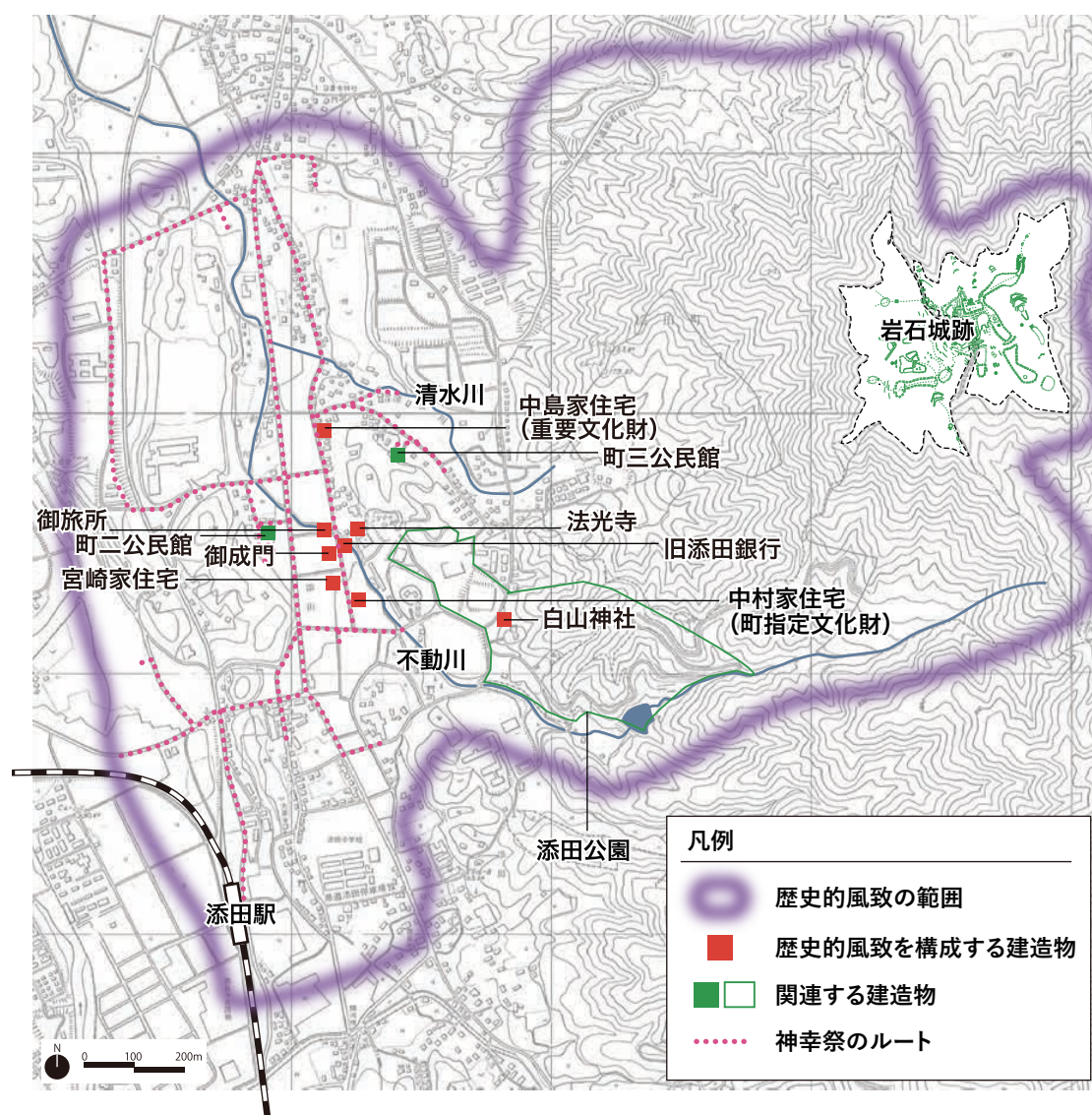


図 添田本町地区と神幸祭にみる歴史的風致の範囲

コラム2 白山宮の権現祭

添田本町地区では法光寺前にあったゑびす様のゑびす祭、白山宮の権現祭、白山宮の秋大祭が行われていた。ゑびす祭は近年行われなくなり、秋大祭も権現祭と併せて行われるようになっている。

白山宮の権現祭は添田旧町部の祭りで現在の行政区単位では添田本町地区のある町一・町二・町三・町四行政区の氏子が参加して行われている。

旧暦 11 月第二午の前日に町一・町二・町三・町四の回り当番で宮座が行われていた。そのとき、宮柱宮崎家に保管されている 3 枚の「オト帳」という錦の垂幕を神殿に掛けなくては祭典が始まらず、供物や直会座の規律も厳しかったという。当场渡しという来年の当番への引継ぎには豆腐十丁を礼として差し出し、祭り帳と一緒に引渡していた。

この「オト帳」を保管している宮柱宮崎家は地域では「御隠居」と呼ばれ、記録では寛永年間から白山宮造営のときの施主を務めた。

「オト帳」は荘厳な花草竜紋の錦で出来ており、天保 3 年（1832）5 月に寄進されている。このことから権現祭は江戸時代後期には既に行われていたものと考えられている。

権現祭は現在、10 月中旬の日曜に行われており、同様に町一・町二・町三・町四で回り当番で行われ、当番となった座元は白山宮宮柱に出立を促す。以前は「3 回呼びに来るまで出立しない」といわれ、かつての御当主も若い頃早く出向くのを母親から窘められたという。ようやく、宮柱が神社へ出向き、「オト帳」が神殿に掛けられると、神主の祝詞奏上が始まる。参列者への修祓いの後、宮柱から玉串拝礼が始まる。祭典が終わると直会座が始まり、当番渡しが行われる。

権現祭の後、後日組内では内座と呼ばれる権現祭の講が持たれ、今でも広く信仰されていることがわかる。

このように今でも厳しい規律で祭りが行われ、添田本町地区の秋の風情として権現祭が行われている。



宮柱宮崎家に伝わる「オト帳」



宮柱が神前にオト帳を掛ける様子



白山神社で行われる権現祭の様子